



カケハシ・プロジェクト（米国） イノウエ・プログラム招へいの記録

1. プログラム概要

【目的・概要】

イノウエ・プログラムは、日米両国の大学生による相互交流プログラムであり、今回は日米に対する理解促進を目的として、東京都と宮城県に招へいしました。訪日中は、学校交流や視察等を通じて社会、歴史、文化、地域創生、震災復興などについて理解を深めるとともに、日米の大学生同士の友情を深め、ネットワーク強化を図り、日本の魅力を発信しました。

【参加者】米国の大学生 28 名及び引率者 4 名 合計 32 名
（内訳）ロヨラ・メリーマウント大学の生徒及び引率者 16 名
クレアモント・カレッジズの生徒及び引率者 16 名

【訪問地】東京都、宮城県

【日程】

■ プレプログラム（オンライン事前学習）：

2 月 20 日（木曜日） 【来日前オリエンテーション】事業目的・ミッション、日程説明、
渡航上の注意、感染症対策等
来日までの指定期間 【動画視聴】日本理解講義（Web Japan より選択）

■ 招へいプログラム：

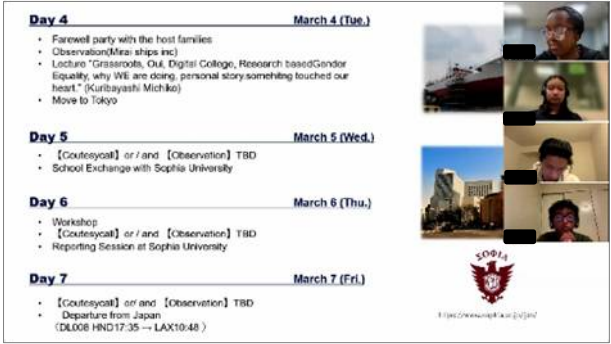
3 月 1 日（土曜日） 羽田空港より入国
【来日時オリエンテーション】
3 月 2 日（日曜日） 東京都から宮城県へ移動
【講義】「防潮堤計画と市民活動～里海と砂浜を守る取り組み～」
講師：気仙沼市議会議員 三浦 友幸 氏
【ホストファミリー対面式】
3 月 3 日（月曜日） 【ホームステイ】南三陸町
3 月 4 日（火曜日） 【ホストファミリー歓送会】
【視察】株式会社みらい造船
【講義】「災害後の地方におけるジェンダー平等」
講師：特定非営利活動法人ウィメンズアイ 理事 栗林 美知子 氏
宮城県から東京都へ移動
3 月 5 日（水曜日） 【視察】日本科学未来館
【学校交流】上智大学

3月6日（木曜日） 【ワークショップ】 報告会準備（訪日成果のとりまとめ、帰国後の活動計画（アクション・プラン）の作成）
 【報告会】 訪日成果・帰国後の活動計画発表
 【表敬訪問】 外務大臣政務官 英利 アルフィヤ 氏

3月7日（金曜日） 【視察】 東京スカイツリー®・東京ソラマチ®
 羽田空港より出国

2. 記録写真

プレプログラム（オンライン事前学習）

	
2025 年 2 月 20 日【来日前オリエンテーション】	2025 年 2 月 20 日【来日前オリエンテーション】

招へいプログラム

	
2025 年 3 月 2 日【講義】「防潮堤計画と市民活動～里海と砂浜を守る取り組み～」	2025 年 3 月 3 日【ホームステイ】
	
2025 年 3 月 4 日【視察】株式会社みらい造船	2025 年 3 月 4 日【講義】 「災害後の地方におけるジェンダー平等」

	
2025 年 3 月 5 日【視察】日本科学未来館	2025 年 3 月 5 日【学校交流】上智大学
	
2025 年 3 月 6 日 【表敬訪問】外務大臣政務官 英利 アルフィヤ 氏	2025 年 3 月 6 日【報告会】

3. 参加者の感想（抜粋）

◆ 大学生

宮城で受けた講義に最も感銘を受けました。災害復興に対するコミュニティ構築と市民活動というテーマは非常に刺激的で、地域社会内で信頼を築くことが公共政策の重要な部分であることを教えてくれました。同様に、ウィメンズアイの講義では、女性の参画度合いを「積極的」から「無関心まで」のアクターに分類したピラミッド図が気に入りました。この図は、ウィメンズアイがすべての階層の地方に暮らす女性問題に取り組んでいることと、このアプローチの方法が、政府の行っている既存のコミュニティ・リーダーに焦点を当てた方法とどのように異なるかを示していました。

◆ 大学生

交流プログラムで最も印象に残ったのは、ウィメンズアイの講義と上智大学での交流です。ウィメンズアイは、私にインスピレーションを与えてくれました。世界や男女不平等についてだけでなく、何か小さなことでも始めさえすれば大きな影響を与えることができるということについても考えさせてくれました。

上智大学の学生との交流は、とてもいいインパクトがありました。なぜなら、交流する前の私は「もしかしたら彼らと私たちはあまりにも違いすぎてうまくやれないのではないかと、不安に感じていたからです。しかし、実際に対面した瞬間、すぐにつながりを感じました。共に集い、笑い、学び、そして長く続くと確信できる絆を築けたことに我ながら感動しました。

◆ 大学生

この日本訪問では、ホームステイと気仙沼の防潮堤に関する対話について学んだことが最も印象に残りました。ホームステイは初めてでしたが、日本の日常生活にどっぷり浸かることができました。日本人がどのように生活しているかということに対する見方が大きく変わりました。また、防波堤については気仙沼（大谷海岸）の防潮堤建設に関する関係者との対話を通じて、防潮堤の建設に地域の人々がどれだけ関わっていたかがよくわかりました。防潮堤は、地域の意見を無視した政府の決定ではなく、環境への影響、費用、海岸の景観、海岸の保全などを考慮した地域の決定であり、気仙沼のコミュニティの人々の結束が固いものであることがわかりました。

4. 受入れ側の感想（抜粋）

◆ 交流校生徒

一つの教室に集まり、大変あたたかい雰囲気の中で、米国の学生の皆さまをお迎えすることができました。挨拶やアイスブレイクのアクティビティでは、主に米国のゲームを体験することとなり、会場全体が大いに盛り上がっていた印象があります。その後の渋谷散策においても、電車内や街の至る所で日本の文化について積極的に説明を行い、ツアーガイドさながらのカジュアルなフィールドワークのような体験を提供できたのではないかと感じております。

上智大学の魅力だけでなく、日本人学生の雰囲気も伝えることができ、参加者の皆さまに好印象を持っていただけたことは、私たちにとって大変光栄なことでした。

◆ 交流校生徒

秋学期の終わりに日本の友人と「最近、学食の値段がずっと上がっているよね」と話していましたが、キャンパスツアーの際、米国の学生が学食の値段が「安すぎる！」と驚いている様子を見て、私自身も驚きました。経済的な状況や物価に大きな違いがあることを改めて実感しました。

◆ 交流校職員

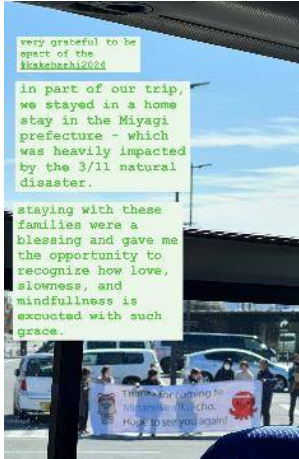
米国の学生の社交性と好奇心のおかげもあり、大変和やかな交流の時間となりました。

本学の学生においては、様々な状況や相手に対して柔軟に対応できる学生、楽しむことができる学生、積極的に挑戦する学生、そして課題を感じる学生など、色々な側面が垣間見え、大変有意義な時間であったと感じております。

◆ ホストファミリー

生活の中で常に使われる感謝の言葉「ありがとうございます」を方言で「ありがとうございますてがすた」ということを教えたところ、何回も練習をして大笑いしていました。特に歓送会のパフォーマンスには心が和みました。お陰様で海外を身近に感じることができました。

5. 参加者の対外発信（抜粋）

	
2025 年 3 月 2 日（Instagram） 今日、私たちは、気仙沼を襲った 3.11 の津波とマグニチュード 9.0 の地震について学びました。 気仙沼の人々は、防潮堤が環境に与える影響について何年にもわたって議論と討論を重ね、最終的にどのような防潮堤にするのかについて合意に至ったようです。	2025 年 3 月 4 日（Instagram） 今回のプログラムに参加できたことに心から感謝します。 今回の滞在では、3.11 の自然災害で甚大な被害を受けた宮城県でホームステイを行いました。 このような家庭に滞在できたのは幸運であり、愛、ゆったりとした暮らし、マインドフルネスがいかに豊かに行われているかを認識する機会となりました。

6. 報告会での訪日成果とアクション・プラン発表（抜粋）

訪問地：東京都、宮城県 全 4 グループ発表

グループ 1		
		
【成果の発表】 ◆ 訪日中の学び： 宮城県で受けた大谷海岸防潮堤建設に関する講義、みらい造船視察、ウィメンズアイでの講義から大きな学びを得ました。 防潮堤建設では、合意形成へ向けてどのように信頼関係を構築していったかを、中立的立場のステークホルダー向け勉強会の開催などから学びました。 みらい造船では、震災で被害を受けた気仙沼の造船業を決して絶やしてはならないと、100 年先を見据えた展望をもとにライバル社 5 社が肩を組んで一つになったことに感銘を受けました。 ウィメンズアイでは、組織のサポートと教育によって田舎の女性の社会参画を促し、過小評価されている女性たちの潜在能力を引き出していくアプローチが素晴らしいと思いました。		

◆ 個人的展望：

宮城県の各種プログラムからインスピレーションを得て「コミュニティのメンバーを鼓舞し、動かしてコミュニティに意味のある変化をもたらす」ことこそが私たちの担うべき使命であると確信しました。特に「コミュニティの力を引き出すこと、他者の意見とのバランスをとること、コミュニティツールキットの発掘」という学びを今後の行動に活かしていきたいと思っています。

【アクション・プラン】

大学でワークショップを開催することで、宮城での学びを共有し、建設的な会話に参画する機会を作り、ひいては教育を通じて新しいリーダーを育成していく場にできればと思います。

具体的には、三か月にわたって開催する2つのワークショップを考えています（4月第1火曜日（異文化ファシリテータープログラム）と5月の第1火曜日（アジア太平洋学生サービス）に実施予定）。多様な視点と背景を持つ仲間を尊重し、交流する場にしていきたいです。

グループ 2



【成果の発表】

◆ 訪日中の学び：

一つめはレジリエンス（精神的回復力）です。3.11のような災害後の回復力、復旧と再建の取り組みには多くの場合地域住民との長い議論を必要だったことを学びました。

また、宮城のホストファミリーや東京の学生との交流の中で、米国人が通常知らないような日本の生活様式、習慣、伝統に触れることができました。さらに、人々にはそれほど違いはないこと、他の文化に対する理解を深める大切さにも気づかせてくれました。

◆ 個人的展望：

勉学の面では、異文化への洞察を学問の追求に取り入れることでより豊かな研究と議論に役立ていきたいです。個人のキャリアという点では、多様でグローバルな環境で働くために不可欠な文化的能力と適応力を養っていこうと思っています。

コミュニティの一員として、今回得た知識や経験、洞察を共有し、日本で構築できたご縁や関係を維持することで、異文化間の関わりを促進したいと考えています。

人生全般においては、未知の文化に常に心を開いていること、何事にも感謝の気持ちを持って取り組むことなど、この経験から学んだことを日々の交流で活かして多様性を受け入れていきたいと思っています。

【アクション・プラン】

今回の経験をまとめたスクラップブックをデジタル版（PDF版）と印刷版（書籍版）両方で制作し、大学関係者へ配信・配布することで、人々の日本への関心を高めたいと思います。複雑すぎるフォーマットはかえって人々の興味を掻き立てないため、このような形式を選択しました。スクラップブックでは日本での人々とのふれあい、日本の地方の暮らしで学んだことなどを各自が創造的に表現できるような仕様にするつもりです。私たちが日本人と交流して感じた気持ちを形にし、一人でも多くの人に知ってもらいたいと思っています。

グループ 3



【成果の発表】

◆ 訪日中の学び：

防潮堤の講義をしていただいた講師の三浦氏のように地元に積極的にかかわることの大切さや、ウィメンズアイのように初めは小さなボランティアグループでも活動を広げ、やがて社会に変化をもたらすことが可能であるということを学びました。

◆ 個人的展望：

今回の経験で学んだことを活かし、共助の精神や帰属意識を持てるコミュニティを作ります。このコミュニティでは文化の垣根を越えて自由かつ率直に話すことができるようにし、異なる文化を持つ他の組織とのつながりを作ります。

【アクション・プラン】

2 か月以内に日本文化や今回の学びを記した自主的な出版物を作成します。春学期から秋学期までの学内イベント等は配布場所で学生に配布し、今回の学びを広く伝えて、将来、日本文化を伝えることのできるリーダーを育てたいと思います。

グループ 4



【成果の発表】

◆ 訪日中の学び：

大谷海岸では地域住民の合意形成、ウィメンズアイでは男女共同参画社会の取り組みについて学び、政策策定には地域の合意が大切であることを学びました。また災害復興やコミュニティの団結には信頼関係が大切であることも学びました。

◆ 個人的展望：

「生きがい」をテーマに今回出会った人たちにインタビューを行ったため、取材を通して学んだ日本人の考え方を米国人に伝えていきたいです。「生きがい」に相当する英単語がないため、日本人が話す「生きがい」を米国人の視点から見ることで、より正しく理解できるのではないかと考えています。

【アクション・プラン】

帰国から1か月後に、「The student life」という学内新聞に今回の体験や学びを記載し、発行します。また学内の施設において、帰国後3か月後に自分たちの学びを学内の人たちに伝え、質疑応答なども行います。さらに1年間かけて、学内のアジア地域学に関する学部や他の施設で自分たちの経験を伝える機会を持つことを想定しています。

実施団体：一般財団法人日本国際協力センター（JICE）